明治三十八年七月一日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

めいぢの女子

愛をもて眞理を行ひ長ちて凡てのこと首なるキリストに效はしめんためなり（以弗所四〇十五）

第二卷第三號

基督教女子青年會とは何ぞや　社説

女子の性質と基督教　本田増次郎

進撃的基督教　山室軍平

聖書研究　マクドナルド孃

靈魂の翼　ボザンケツト孃

學校の歸途に思へること　しのぶ

家政

雜錄

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

『明治の女子』は日本基督教女子青年會の創立委員が發行する月刊の聖書研究録なり。

『明治の女子』は一年分十二冊の定價郵税を併せて金五十錢。

發行所は東京市麹町區富士見町五丁目廿二番地。

日本基督教女子青年會の創立委員は

委員長 ホイットマン孃
幹事 ワイコフ孃
ワージントン孃
ウエスト孃
津田(梅子)孃
花井夫人
ヘルム夫人
フィシャー夫人
平野孃
小崎夫人
エリス孃
ソーパー孃
フェルプス孃
ハミルトン孃
トリストラム孃
ザーフルー孃
佐藤(錦子)孃
河井(道子)孃
萬國基督教女子青年會日本支部幹事 モリソン孃
同上 エー、シー、マクドナルド孃

明治三十八年六月廿八日印刷
明治三十八年七月一日發行
(定價 一冊四錢 郵税五厘)
(一年分(十二冊)郵税共五十錢)

東京市麹町區土手三番町十五番地
發行兼編輯人 テー、イー、モリソン

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
印刷所 株式會社國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子 第二巻第三號 明治三十八年七月一日發行

明治の女子

基督教女子青年會とは何ぞや

今基督教女子青年會の何たるかを述ぶるに先ち、請ふ我等をして、少しく一般基督教青年會の過去に於ける沿革を語らしめよ。

青年會の起原

基督教青年會は、今を去ること約そ六十餘年前、即ち千八百四十四年六月、英京ロンドンに創設せられたり。而してこれが創立者は、當時敬虔なる基督教信徒たる一呉服店の番頭にして、今八十餘歲の高壽を保ち、光榮ある餘生を送り、この事業の盛運を目擊しつゝある士爵ヂョルヂ、ウイリアムス氏なりとす。此青年會は青年の信徒を涵養する上に偉大の功績あること、一般識者の認むる處となり、英國に於て此新組織を學ぶ者多かりしのみならず、程なく米國にも輸入せられて、千八百五十一年十二月には、モントレール及びボストンに於て青年會を組織したり。同時に此事業歐洲大陸にも傳播するに至り、千八百五十五年には佛京巴里に於て、萬國基督教青年會の大會を開くの運びに至りぬ。

千八百六十六年米國アルバニーの大會に於て青年をして青年間に働かしむるを以て青年會の根本主義となすに至り、米國青年會の眞生命玆に始めて發揮せらるゝを得たり。その以前にありては事業餘りに多方面に亘りしため、動もすれば散漫放逸に流れ、精力を徒費するの傾向を免れざりき。此改革は青年會事業の發達史上に特筆大書すべきものなりとす。而してこれより更に肝要なる主義は、青年會の宗教的組織なるの一事にあり。實に青年會は其記臆すべき發端をヂョーヂ、ウイリアムス氏の祈禱會及び聖書研究會に有する也。而して巴里の萬國基督教青年會大會は、左の綱領を議決し

たり。曰く、

『基督教青年會は聖書に依りて耶蘇基督を神及び救生と崇め、教義及び生活に於て彼の弟子たらんと欲する青年を結合し、且青年間に主の王國を擴張するために協力一致することを期す。』

こゝに至りて青年會の本領炳乎として火を睹るよりも明かなるを得たり、爾來歐米諸邦に於ける青年會の事業は、駸々乎として發達せしが、その中最も長足の進歩をなして、社會の耳目を聳動したるものを米國青年會とす。米國の青年會は、夙に青年なるものゝ發達し得べき生理的、社交的、宗教的性質あるを看破し、この三性質を同時に開發するの方針を採り、青年に供するに聖書研究、信念養成に要する一切の便利と、懇切なる指導を以てしたるの外、體育を奬勵する萬般の裝置、社交的快樂を助成する各種の會合、智的要求に應ずる圖書の貸與等を併設せしかば、情暖き家庭を離れ友なき異鄕になやむ學生、一日の勞働を終へて無聊に苦む勞働者の如きは、喜びて皆青年會に投ずるに至りぬ。かくして幾多の青年は同會の庇護により、誘惑多き都會に於て、純潔高尙の生活を營むを得たり。青年會の功益又大ならずや。米國青年會の事業の範圍は、年を追うて擴張し、學生、勞働者、番頭、鐵道工夫、兵士、水兵のために設定せられたるもの既に千幾百の夥しきに達せりといふ。

萬國基督教青年大同盟

今や凡ての事世界的となれり、政治、法律、貿易を始めとして、萬般の事みな世界的色彩を帶ばずんば已む能はざる傾向あり。基督教學生の世界的同盟も、この趨勢に驅られて發生せし一顯象なりといふも、敢て不當の言にはあらざるべし。千八百九十五年八月、瑞典キッテルン湖畔のバデステナ古城内に、將來基督教會史に重要なる場所を充たさんとする學生の一大集會は開かれぬ。ワルトブルグ城が聖書飜譯中のルーテルを庇護せし以來、一古城にして斯くの如く人類一般の福祉を增進する目的に用ゐられたるものはあらじ。此

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會合は當時既に存立せし英吉利、米國、獨逸、スカンヂナビヤに於ける大學、高等學校青年會の同盟、及び傳道諸邦に於ける基督教青年運動の代表者より成立せり。數日に渡れる熱心と祈禱とに滿てる論議の末、遂に萬國基督教學生青年會大同盟は成立し、且滿場一致を以てこれが憲法を承認せり。同盟は洵にいみじくも命名せられぬ。そは既に其目的及び外延に於て世界を舞臺とすればなり。この同盟は無條件に基督教的にして古めかしき諸組織の再現又は結合に非ず、學生運動の連合なりとす。而してこれに屬する各會は、各自の獨立と特色とを有す。此大同盟の目的とする所は、即ち世界の學生を基督に導き、彼等を基督によりて教育し、以て世界的傳道の急務に應ぜしめんとするに在り。

其後我日本基督教學生青年會同盟を始めとし、濠洲基督教學生同盟、南亞米利加基督教學生同盟、及び支那高等學校基督教青年會同盟の如き、みな此大同盟に加入するに至りぬ。此大同盟の設立ありてより以來、各國學生の道義的、宗教的狀態の完全なる調査は始めて出來得べき事となれり、各同盟は此の大同盟を通じて、相互の間に精神的交通を開き、長短相補ひ、東西相呼應して進歩せんとする美風を生ずるに至りぬ。グラッドストン嘗て中世紀に於ける諸大學の影響に就き述べて曰く、『切言すれば大學は人心に電信を通じたるもの也。全歐に散布せし智的修養の一切の分子は、これがために互に接近するを得たり。大學は理性に關する一大同胞體團といふべし』と。この語移して以て青年大同盟を評するを得。各國學生青年會に依りて成就せられたる、運動の方法、各人種の學生間に完成せられたる理想、及び東西兩洋の學生間に完成せられたる事業は、此大同盟を通じて相知るを得るに至りぬ。誰かこの種の團體の將來に於ける事業の功果を豫知するを得んや。此大同盟の主要なる目的は、各國の基督教事業を統一するにあれども、將來各國民の先覺者たるべき學生を、基督の全能の力によりて結合せるが故、國交條約に比して更に强大にして、更に永續的なる連鎖を以て、諸國民を統一するに偉大なる貢獻をなすべき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、固よりその所也。あゝ、この『戰爭及びその風評の』時代に於て、この學生團體の範圍內には、英なく、米なく、佛なく、支那もなく、日本もなく、只基督のこれを統轄せるを見るのみ。

論説

女子の性質と基督教

本田増次郎

男子は強きを以て優り女子は美に秀づ。男子は智にすぐれ女子は情に強し。男子は義に勇み女子は慈愛を專らとす。思想敏捷にして感覺精細なるは女子の長所なり。義務を重んじ人情に篤きは女性の美德なり。純潔を愛し慈悲に富み同情の深きは婦人の男子に越ゆる所なり。夫に仕へ家を理し子を產み子を育つるなど、中等以下の社會に在りては婦人の生涯は尤も献身の甚しきものなり。

斯く女子の一面は天人の如く光り輝くと共に、女子にも亦暗黑の方面あり缺點あるを免れず。虛榮(見え)を好み嫉妬に陷り易く、人を怨み憎む心抑えがたく夫や子について案外野心を逞うするものなり。思想狹隘固陋にして寬容の度量に乏しく、事の大局を通觀せずして之にかゝはる人を見て動くの弊あり。要するに女性は感情を以て男子に優ると等しく、感情の教養その宜しきを得ざる時は、天女の姿はやがて惡魔のそれに變ずるなり。

今もし基督教と基督教以前の歐羅巴の異教とを比較する時は、異教は男子的にして基督教は女性的なるの狀あり。異教は勇、剛、愛國、大量等に於て秀でしが故に、其の精神は希臘の美術即ち彫刻に現はれて後世に遺れり。彫刻は男子的の理想を發表するに宜しき美術なり。基督教は謙遜、柔和、忍耐、慈愛、信仰、柔順等に於て勝るゝが故に、其の教義は羅馬の美術即ち繪畫にこもりて今日に傳はれり。繪畫は女性的の理想を發揮するに適せり。異教のすたれて基督教の之に替れるは、女性の美德長所が天下を風靡するに至れるな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り。

されど基督教は一時餘りに女性的となり過ぎたり。舊教は音樂、繪畫、建築等の優美壯大に重きを置き、教權を强大にして一般信徒には唯溫和信賴の必要のみを教へ、所謂他力の宗教となり過ぎたるが故に玆に宗教の大革命は來れり。新教は比較的自力の宗教なり。信徒各自が眞理を探究し義務を遂行し品性を修養するにあらずんば、法教師の力のみに依賴して天國に入るを得ざるを說くに至れり。彼のカルビンの宗教の如き又淨教徒(ピユーリタンス)の信仰の如き、共に基督教中の尤も男子的なるものにあらずや。

近ごろ歐米の基督教會(新教の)に花を飾り音樂を盛んにするの傾向あるは、基督教が男子的になり過ぎたるを再び女性的に引き戾すものにあらざるか。たとへ一進一退の小波瀾ありと雖ども、到底基督教は女性的の宗教なり、愛の信仰なり、獻身の宗教なり、純潔の主張者なり。女性の美德を以て男子の長所に加へ女子の特性を以て男子の短所を匡正するの教へなり。是に於てか基督を奉ずる女子の地位責任の高く且つ重きを知るなり。

進擊的基督教

救世軍少佐　山室軍平

是に於て散されたる者ども徧く往て福音を宣傳へたり(徒八〇四)

◎散らされたる聖徒

恩惠と能力に滿ちたるステパノが、既に殉教者の魁となつて、屍をエルサレムの城外に橫へて以來、迫害の火の手は到る處に擧り、中にも後年のパウロ、即ち當時のサウロの如きは、諸教會を荒して尙あき足らず、果は信者の家々に迄も亂入し、男女に拘はらず、曳出しては之を牢屋に投込むと云ふ如き有樣。エルサレムの信者達は、使徒達を除くの他、殘らずユダヤ、サマリヤの間に散らされて了ひました。併し乍ら散らされたる聖徒は屈せず、「徧く往て福音を宣傳へたり」と、使徒行傳に錄してある。是は短かい一句なれ共細かに味

へば其中に、初代敎會の信者達の、信仰、氣象、覺悟人物等を現はして居る者かと考へらるゝ故、今其等の點に付て少しくお話しを致し度と思ふ。

◎獨立の信仰

第一、彼等は獨立獨歩の信仰を有つて居つた。人眞似や、理窟上や、又は儀式の上の信仰でなく、實際基督は我救主である、訓慰師なる聖靈は今、自分の胸の中に働いて在すといふ、活た信仰を抱いて居つた者であります。それ故に彼等は迫害に遭ひ、市を逐れ、傳道者と離れ、同志の人々と別れ、老いたる者を扶け、幼き者の手を曳て、他國に流浪せねばならぬ樣な身の上となつても、屹度其信仰を守つて之を失はない許か、到る處人を救に導いて居つた者であります。彼等は散り々々になつて唯一人、非常の逆境に身を置く樣な塲合にも、基督のごとく「我獨り在るに非ず父我と偕に在るなり」と、言ふことの出來た者共であり升。

◎進擊の精神

第二、彼等は進擊の精神を以て、靈魂の救の爲に戰うた者である。彼等の中には商人もあらう、職人もあらう百姓もあらう、醫者もあらう、身分こそは色々に異へ共、何れも各々の救主として、其周圍の人々の救の爲に働いた者であります。彼等は火の子の如き者である。飛んで行つた先々に新らしい火事をひき起し升。又雪達磨の如き者である。轉がる度每、其大さを增し加へて居ることを見ます。即ち近世救世軍の歷史に於ても、一箇の建築師サウンダルスと、牛乳屋のゴーアなる者が濠洲に落合ひ、協議の上で家を借り、集會を始め、又金の工面をして士官の路用を送り、英國から一人を派遣して貰うて、救世軍を其地に創めたる結果が総に今日の大軍隊を濠洲に見ることとなつたやうに、又はフヰンランドの一少女ハートマンが、一人で迫害、困苦の中に戰を始めたる結果が、今日其國の救世軍の土臺となりたる如きは、亦皆此初代敎會の信者と同じ進擊の精神に由つて、立働きたるものと謂はねばなりませぬ。

◎患難は定命なり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第三、彼等は又基督の爲に苦勞を甘んじました。難義苦勞は是眞面目に基督に從ふ者に、定まる所の運命である。「凡て基督耶穌に在て、神を敬ひつゝ、世を渡らんと志ざす者は窘を受べし」。而して何時の代にも基督の教會に一番缺けて居る者は、學者物識でなく、金持でなく、建築物でなく、出版物でなく、辯說家でなくつて、眞面目に教會の爲に苦勞する人物であり升。「今我儕曹の爲に受る苦みを喜び、又わが肉體を以て基督の體、即ち教會の爲に其患難の缺たる所を補ふ」と。使徒パウロの覺悟はまた今日私共の覺悟でなくてはなりませぬ。初代教會の信者は、喜んで基督の苦みに與かつた者である。彼等は其信仰ゆゑに財產を奪はれ、家を逐立られ、職業を失ひ、乏しくて飢え、囹圄と縲絏の苦みを受け、曠野と山と、地の洞とを彷徨ひ歩き乍らも、其れさへ屈せず行く先々に盛んに救の御軍を戰うた者であり升。

◎日向の臥龍梅

私は或時、日向の國高鍋から二三里奥の山の中にて、臥龍梅といふ珍らしい梅を見たことがある。之は誠に稀有の老木にて、高さは僅か二三丈位に過ないけれ共其枝は平たく數町步の地面を掩うて居り、格別に面白いことは、此梅の枝が何れも二三間乃至四五間伸びると地に垂れて其處から新しい根をおろし、又伸び上つては數間先きに行つて根をおろし、何のことはない枝と云ふ枝が何れも彼の岩國の錦帶橋の樣に、伸び上つては下り、又伸び上つては下りして、前申す如く唯一本の株から出たる枝許りで、よく數町步の地面に廣がつて居ることであつた。依つて思ふに初代の基督教會が逸早く成長したるわけは、信者銘々、丁度此臥龍梅の枝の樣に、散されて行つた先には根を下し、旅行して立寄つた所には又根をおろし、一人から二人、二人から四人にといふ臥龍梅に、膨脹して行つたのが其原因ではムりますまいか。私共は亦初代教會の信者に倣つて、臥龍梅流の運動を試みねばならぬ。即ち苟くも私共が身を置く所は、家庭と云はず、學校と云はず、會社、お役所、商店、工場、得意先でも、親類緣者でも、乃

至初對面の人の間にも機さへあつたら必らず福音の種を播き、恩惠の根を其處におろし、而して末は天飛ぶ鳥をも宿す程の、大木の其處に育つて出ることを俟望まねばなりませぬ。諸君、往いて其立場々々から周圍の人々の救主とお成りなされ。

聖書研究

馬可傳研究復習

幹事　マクドナルド

第一研究　全能なる事を行へる耶蘇

●第一週第一日　馬可は基督を以て、群衆の間に奔走し、多くの不思議なる事を行へる、忙しき活動の人として、これをその傳中に描けり。

本傳所載の奇蹟幾何。

一章より八章に至るまで幾何ありや。

前章以下に於て幾何ありや。

六章五、六節を讀め。『彼等が信せざるを以て、イエスはふしぎなる事を行すこと能はざりき』。神を信せざるがために、我等は神が我等のため爲したまふべき能力を局限せんとす。われ果してかゝる過誤に陷れるなきや否や。

●第一週第二日　耶蘇の奇蹟中、おのれの力を示し給ひしは如何なる場合に於てなりや。

一、汚れたる鬼。一章二十三―二十七。

二、病氣。一章二十九―三十一。

三、罪。二章五。

四、自然。四章三十五―四十。

五、死。五章三十五―四十三。

上記以外の引照をも參看すべし。

馬太傳二十八章十八節を讀め。この節に於ける言を爲せしもの我等に告けて曰く、純潔無私の生涯を送るべき力を汝等に與へんと。我等は敢てこれを得んとて神に任かせつゝありや。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●第一週第三日　二章十節、二十八節以下八章まで讀め。基督は只二回この『人の子』の稱呼を用ゐ給へり。

彼はおのが身についていかにいひ給ひしぞ。

『かれ地にて權威を持てり』。『彼は主なり』。この二つの塲合に於て彼は地上の權威を要求し給へり。後章に至つて、彼が天上の權威を要求せるを述ぶ。こゝろを留めて、この邊の消息を視、また彼の身邊に襲ひ來る障礙の何たるかを學ぶべし。

『人の子は地にて罪を赦すの權をもてり』。諸君はその心を披歴して、主がおのれの力を現はしたまふべき機會を與へしや。

●第一週第四日　耶蘇の公衆に對する全能なる働と偉大なる力とは、本傳の中に明かに記載せる所なるが、これと共に、また耶蘇が群衆を離れて、獨り神と相交り給ひし記事をも、我等は諸所に散見するを得る也、耶蘇をしてかく力あるものたらしめたるものは、偏にこの神との交通による也。

一章三十五節。主の退隱に先ちて起りし事柄に注意すべし。

六章四十六節。耶蘇は今いづこより來給ひしや。

十四章三十五節。我等の罪の戰は戰はれたり、耶蘇は天の父と共に、この戰ひを完うし給へり。

何人と雖も、主の痛苦の如何なりしかを理解することを得ず。只我等はその勝利の餘澤に浴し、すべて彼を信ずるものに示さるゝ救の道に與るを得るのみ。

●第一週第五日　またある時、耶蘇はその直弟子を伴うて祈禱をなし、かつ新らしき王國について教へをなし、相共に安息の妙域に到らんがため、群衆の間を遁れ給ひしこと一再に止まらず。

三章七節。三章十三節。六章三十一節。七章二十四節九章二節。十一章十九節。十四章十七節を讀め。

耶蘇の如く孤獨寂寞の生涯を送れるものなし。その親戚故舊と雖も、彼に對して同情を與ふるものとては殆んどこれなかりしが如し。彼語つて曰く、『われ獨あるにあらず、父と共にあり。そは我恒に彼の心に適ふ事を行へばなり』。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

諸君はかくの如き言を發することを得るやう、自ら勉め給ふ處あるか、如何。我等は耶蘇によりて、事を爲さば、一として遂げ得ざるものなし。

●第一週第六日　憎惡

耶蘇世に出で、、福音を宣傳し給ふ。一章十四節、十五節。然るに多くの人々は彼を憎みて、遂に彼をして死に到らしむ。その故如何。耶蘇の來るや、人々の心を潔うして、これに宿り給はんとのみ心なりき。されどかのパリサイの徒、淸き生活を送るを好まず、却つてこの世の國を治むるをもて滿足せんとす。これ故に耶蘇が彼等のあしきを知りて、公々然これを攻撃するを見て、彼等は嫌惡措く能はざりき。

また彼等が耶蘇を忌みしは、その天の福音を聞くことを欲せざるに依る。十章四十二節―四十五節及び十一章十五節―十八節を讀むべし。耶蘇が人を愛して、これを助くべきことを敎へつゝある間に、彼等は神の家にて、私利を營みつゝありき。されば彼等の耶蘇に對する嫌忌たるや、只自己の奸惡に歸するの外、他に一點の理由なきは怪むに足るものなし。

基督は常に我等の罪あることを啓示し給ふ。彼のきよき品格より輝きいづる光明に照さるゝ時は、何物もその潔きを消失し、その眞を沒却す。然り、もし一點その潔くしてまことなる處あらば、これ偏に彼によりて保有せらるゝものなるを知るべし。諸君は既に基督の潔くしてまことなることを認め給ひしや。彼曰く、我に來るものは、われ必ずこれを棄てずと。

●第一週第七日　友情

耶蘇傳道の初、この世をきよく渡らんとねがひし僅少なる群の中に、耶蘇の友人となり、弟子となれるもの數人ありき。一章十六節―二十節。二章十四節。五章二十五節―三十四節を讀むべし。また約翰傳十五章十二節及び十四節を讀みて、耶蘇が人々に向つて友情の條件として指摘し給へる處のものを見るべし。われは果して日毎の生活に於て、主の友情に適ふ行をなすことを努めつゝありや。

第二研究　耶蘇の教訓

●第二週第一日　馬可傳を讀むに、最初八章の大部分は、耶蘇の全能なるみ事(わざ)を述べ、それより以下に於てその教訓を掲げたり、この教訓とても多くは弟子等に授け給へる處のもの也。本週我等は耶蘇がおのれの弟子として、いかなる人々を期待し給ひしやを學ばんことを欲す。馬太傳五章三節―十二節を讀むべし。馬太傳に掲げたる山上の垂訓の如きは、耶蘇の教訓中最も完全なる叙述と曰ふべし。

『うゑ渇く如く、義をしたふものは福なり、その人は飽くことを得べければ也』。

●第二週第二日　收穫の豊かなる事

四章一節―二十節を讀むべし。一節より九節に於て播種の譬を見る。左の諸項に留意すべし。

一、播くものは只一人なり。

二、種子は只一種なり。

三、地味の種類に四あり。

い、路傍(みちのべ)

ろ、磽地(いしぢ)

は、荊棘(いばら)

に、沃土(よきつち)

十節より二十節まではこれが説明也。播者(まきて)は神也。種子は神のみ語也。土地はわが心也。わが心果して沃土と稱すべきものなりや。二十節を讀むべし。沃地に播きし種子の、實を結ぶこと夥しきが如く、たゞしき心に播きたる神のみ語は、多くの果實を結びて、他の人々の心に移植せらるゝに至る。約翰傳十五章十六節を見よ。神は諸君を選び給へり。諸君はその召命に應へ給ふべきや。

●第二週第三日　耶蘇の謙讓

弟子等耶蘇と共にあること、殆んど三歲の久しきに及べるに、尙ほ彼等は耶蘇に從ひし報酬として、この世の地位を得んと欲せるが如し。是に於て耶蘇彼等に告ぐるに、眞正なる偉人は他に役せられ、かつ孩提(おさなご)の如くなりて、天父を信ずるにあるを以てす。心をとめ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て三十五節及三十七節を再讀すべし。わが願ふ處果してかの孩提(おさなご)の如き信賴心を以て、主に從ひまつるにあるか。天父はわれを導きて、すべての眞理(まこと)を示し給ふの力あり。十章十三節―十六節及び四十三節―四十五節をも讀むべし。

●第二週第四日　障礙物

九章四十二節―五十節を讀むべし。基督弟子等を戒めて曰く、汝等自らわれに從ふことを勉むるのみならず、また好んで他人をも助け導かざるべからずと。また曰く、さまであしき心より出でたるにあらざるも、凡そ自他の靈的生活を傷ふが如きことなきやう愼むべしと。神は我等に右手を與へて、何事にもこれを用ゐしめ給ふ。何ぞ殘缺(かたは)にて永生に入るを欲し給はんや。されどその右手にして、もし我等を礙かさば、これを斷りて殘缺にて生命に入るかた、全然滅亡に陷るよりも善しとし給へり。十章十七節―二十二節に於て、我等は一青年がおのれの躓石として、財貨を所有せる一例を見る。基督彼に告げて曰く、悉くその所有を擧げて、わが用に出せと。然るに青年はこれを聞きて、哀みうれへて去りぬ。馬太傳六章二十四節を讀むべし。我基督に從はんとするに何物か我を礙かさんとするものあるか。哥林多前書八章十三節、九章二十五節を讀むべし。

●第二週第五日　祈禱

本傳に從へば、耶蘇は、命令よりは、寧ろ摸範を以て、祈禱の何物たるかを人々に敎へ給へり。多忙なる幾日を過ごして後、耶蘇は只獨り遁れて、父に祈り給ひぬ。一章三十二節―三十五節及び六章四十一節―四十六節を見よ。かくて敵の憎惡の聲、漸く起りそめければ(三章七節及び十四章二十六節)耶蘇は時の到れるを知りて、人々を離れ、力を神に求め給へり。而してまた弟子等に敎へて曰く、(九章二十九節)功果ある事業は、只祈禱によるの外なしと。またその一生涯の最後に於ける週間の如き、耶蘇は弟子等に告げて曰く、力ある祈禱の源は、神に信賴し、人を容るゝの雅量に存すと(十一章二十二節―二十五節)。罪人の手に賣さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るべきの時いよ〳〵到來するに及びては、從容死に就くことを得んがために、獨り去つて神と交り給ひぬ(十四章三十二節—四十二節)。基督の勝利はすべて祈禱によれる也。我等も主と同じくこの祈禱の力を持てり。我等は果してよくこれを用ゆるか。約翰傳十五章十六節を讀むべし。

●第二週第六日　弟子

一章十六節—二十節、二章十三節—十四節、三章十三節—十四節、八章三十四節、十章十七節—二十二節を讀むべし。基督ある人々に命ずるに、おのれの弟子となり、生涯彼と共に働くべきことを以てし給ひぬ。最初四人の弟子をして、從來の業を棄てヽ、おのれに從はしめ給ひし約束と、彼等が基督に親みし理由とは只次の一言にあり、曰く『我に從へ、我爾曹をして人を漁る者とせん』。弟子等がその務となすべき處は、天國にいたるの道を人々に示すにありき。たれかその道に迷ふものあるか、而して我等自ら如何にしてこれを導くべきかを知らば、進んでその任に當るべき也。然り世の人々は、その男女を問はず、多くは神にいたるの道に迷へり。而して我等は彼等に先ちて、これを發見したるものなれば、自ら基督の弟子となりて、その道を人々に示すべき責任あり。十六章十五節を見よ。基督は世の人々が彼に聞く處あらんことを待ち給ふ。約翰傳十五章八節を讀むべし。われは果してかゝる弟子たるを得るか。

●第二週第七日　神に屬する物

十一章三節、十二章十三節—十七節、十二章四十一節—四十四節、十四章十三節—十五節を讀むべし。

耶蘇に生命を與へよと命ぜられて、これに應ずるものはまことの弟子といふべし。主は我等の時間、智識精神、身體、すべてのものを求め給ふ。我等よろこんで是等のものを主に献げなば、主は自らこれを用ゐて我等よりも遙によくその功を收め給ふべし。我等は主を棄てヽ、孤立事を爲すも益なし。寧ろ進んでこの身を主に任せなば、主は我等をして更に誠實なる、更に善良なる婦人とならしめ給ふべし。我等は主の買ひ給

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

へるものなり。哥林多前書六章十九章二十節。

第三研究　耶蘇の人格

●第三週第一日　耶蘇がおのれの人格について、弟子等に向つて、何と告げ給へるかを見よ。耶蘇の教訓は我等が學んで、これを身に行ひ得べきことを、彼自身親しく我等に示し給ふにあらずんば、實際殆んどその價値の存するを見ざるべし。約翰傳八章二十九節を見よ。「われ恒に彼の心に適ふことを行へり」。また約翰傳四章三十四節を見よ。耶蘇の人格について、神がいかにいひ給へるかを知らんがために、馬可傳一章十一節及び九章七節を見よ。我等は耶蘇基督に於て眞に神のみ心に適ふ人格の存在するを見る。世の人々は常に我等によりて、耶蘇基督を認むることを得るや、否や。

●第三週第二日　耶蘇の罪なきこと

一章十二節―十三章を讀め。誘惑の何物なるかを詳に知らんがために、路加傳四章一節―十三節を見よ。無罪は誘惑なきによりて存するにあらず、これにうち勝つによりて、初めて罪なきを得。耶蘇は一生涯の間、一擧手一投足の微といへども、またき捷利をえ給へりげに誘惑は、引きもきらず耶蘇の身邊に襲ひ來りぬ。特に馬可傳八章三十三節及び十四章三十四節―三十六節を讀め。彼は神のみ力によりて、連戰連捷をえ給へり。心をとめて四章十五節及び二章十八節を讀むべし。

●第三週第三日　耶蘇の愛

一章四十一節、二章十七節、五章三十節、六章五節六章三十一節、六章三十四節、八章二節、十章十三節―十六節、十章二十一節、十章四十五節、十四章三十六節、十六章二十節を讀め。

約翰傳三章十六節に於て、我等は極めて簡明なる福音を讀む。神はかく愛し給ひぬ―基督はかく愛し給ひぬ―これ實に主の生涯の秘鍵也。彼世に臨み給へり。彼に生命あり。彼は病めるもの、餓へたるもの、疲れたるもの、罪あるもの、望なきもの、凡そ彼れを求むるものには、これに接觸して、その哀憐を垂れ給はず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

といふことなし。彼は力を盡して、天與の務のために一身を献げ、時到るや人々の罪のためにその生命をすて給へり。心をとめて羅馬書五章七、八節を讀め。『爾曹もし相愛せば、これに因りて、人々、爾曹のわが弟子なることを知るべし』。約翰傳十三章三十五節。

●第三週第四日　神聖

一章十一節、一章二十四節、七章十四節―二十三節、九章七節、十一章十五節―十八節を讀むべし。

神は基督宣敎の初めに當りても、その後また彼が變貌の時に際しても、親しく彼を稱してこれわが愛子なりといひ給へり。神聖なるもののみ、初めて神のみ心に適ふを得。惡魔もまた神を聖なりとせり。（一章廿四節）。而して主の敵人さへも、弟子等がユダヤ人の遺訓に背いて、しば〲その手を洗はざりしを難ずるの外他に一言の出すべきものなかりき。

●第三週第五日　耶蘇の任務

耶蘇はおのれの模範により、またおのれの敎訓によりて、彼れがこの世に於て、第一に心にかけしものは即ち人間なることを示し給ひぬ。宣敎の三年間、その數の多少こそあれ、常に人々に接して、神の愛を示しおのが救の道を說き給ひぬ。病めるものを癒し、惡鬼を追ひ、神とその愛に關するくさ〲の疑問に答ふるために、その生涯を費し給へり。これがために、時には困疲飢餓に迫り、孤獨寂寥の感に堪へざることありき。今再び第一週の日課を回想して、一章三十二節―三十九節に示せる日よりこのかた　耶蘇の云爲について考ふべし。彼が弟子等を伴ひ、人々を避けて休息せんとし給へる時、彼はいかに疲勞を覺え給ひしぞ。（六章三十節―三十二節）。されど彼は群衆のおのれに從ひ來るを見て、愛憐の情禁じ難く、遂に彼等を敎へはじめ給ひぬ。（六章三十四節）。彼は人々のために勞して、未だ嘗て倦怠せることなし。彼の世に來るや、神のみ心をなさんがためなりき。人々は耶蘇に來りて初めて安心立命の地を得。これ即ち神のみ心也。加拉太書六章二節。

●第三週第六日　寛容

第二週第五日祈禱の日課に於て、我等は耶蘇が寛容てふことについて敎へ給ひしを知る。されど今に於て我等は彼がいかにこの精神をその身に實現し給へるかを見るを得べし。弟子等が彼の敎訓を行ひ得ざりし故を以て、彼は決して弟子等を斥け給はざりき。十章三十五節―四十五節を讀むべし。耶蘇はこの世のさちを求めて來れる人々の罪を赦し給ひぬ。二章一節―五節彼はゲツセマネの園に於て、彼と共に祈るべきを命じをきし弟子等が眠りゐたりしを見て、敢て叱し給はざりき。(十四章四十節―四十二節)。復活の際に於ても、かつて主を知らずといひし弟子に對して、只慈愛をこめたることばをかけ給ひしのみなりき。十四章六十六節―七十一節及び十六章七節)。かくて彼は遂におのれを憎みし世界人類のために、その生命を献げ、十字架の上にありて、おのれを死にわたせる人々のために祈り給ひぬ。(路加傳二十三章三十四節)。耶蘇は我等が彼を知らざる前に、既に我等のためにその生命を捐て、我等が彼を信ずる時に、我等の罪を赦し給ふ。羅馬書五章八節を讀め。諸君は常に耶蘇の寛容の心を以て、人々に接し給へるか。

●第三週第七日　耶蘇の權威

我等は本週第一日の日課に於て、耶蘇がおのれの人格の摸範を以て、神のみ心にかなふ人物のいかなるものなるかを示し給へるを知れり。彼は尙ほこれと共に、我等にその足跡をふみ行くべき力を與へ給へり。馬太傳二十八章十八節及び二十節を見よ。『すべての權を我に賜はれり。我は常に汝等と偕に在る也』耶蘇の人物行爲の驚くべくして美しきこと、到底これに倣はんと欲すといへども、只それ徒勞に歸せんのみ。されど彼は我等がこれに倣ふことを得べき力を與へんと約し給ひぬ。一粒の種子のみにては、自ら美しき花を生じ得ざれど、地中の力に加ふるに、熱氣と水分との作用を以てせば、蕾忽ち出づ。かくの如く我等は基督のゆるやかなる愛の力をうくるにあらざれば、自ら主の人格をわが身に體現することを得ず。加拉太書五章二十二節及び約翰第一書三章二節及び三節を讀むべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第四研究　耶蘇の仲保

●第四週第一日　耶蘇の敎義

八章二十七節―三十節を讀むべし。

耶蘇のこの大質問は、彼が宣敎の第三年の終に於て起れり。三年の間、弟子等は主と共に在りて、その奇蹟を見、その敎訓を聞き、その類なき人格に驚きぬ。されど今彼の天職につき、何事か新に彼等に示し給ふべき時機の到れるを見て、主は彼等に緊要なる質問を發して曰く、『爾曹は我をいひて、誰とするか』と。彼等は主に就いて親しく見、親しく學びたる處のものを以て、答へて曰く、『爾はキリストなり』と。これ實に基督敎の存亡の岐るゝ處にして、主はこの答によりておのが愛の使命を容るべき餘地の尙ほ存することを知り給へり。人の子は世に役せられんがために來れり。されど彼の來るや、また他に一目的の存するなからず、これに就いては明日の日課に於て學ぶ處あらんとす。諸君は主に向つて『爾はキリストなり』と告ぐることを得るか。

●第四週第二日　十字架の敎義

八章三十節―三十四節を讀むべし。以賽亞書五十三章及び創世記三章十五節を見よ。この中、基督の苦と死とを受け給ふべきを示せり。主が初めて、おのれの死につひて語り給ひし時、ペテロが答へし所を參着すべし―馬太傳十六章二十二節を見よ。―かくて主は弟子等に向つて、おのが苦を受くべきことを告ぐるのみならず、弟子等もまた主の足跡に從ひて、十字架を負はざるべからざることを警め給へり。八章三十四節。馬太傳十章二十四節及び二十五節を見よ。

耶蘇がつぎ〳〵におのが死について告げ給ふ處のものを見よ。八章三十一節、九章三十一節、十章三十三節。彼はこれらの場合に、いつも『三日の後に甦るべし』といひ給へり。

●第四週第三日　榮光の敎義

八章三十五節―三十八節を讀め。基督の敎義（第一日）に次ぐに十字架の敎義（第二日）を以てし、十字架

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の教義に次ぐに榮光の教義を以てす。主が苦難を受けて、死にわたされ給ふことはさることなれど、後父の榮光の裡に、きよきみ使を從へて、究極の勝を得給ふことをも看過すべからず。十四章六十二節、十六章十九、二十節、約翰傳一章十四節を見よ。

●第四週第四日　耶蘇の苦難

路加傳を見るに、主はその死について語れる後、决然としてエルサレムに向ひ給へりといふ。

路加傳九章五十一節。身に一點の罪無うして、却つておのれを憎む人々のために苦をうけ給ふ。かくて十字架に上らんとする時には、おのが親さへ顏をそむけてその樣を見ることを欲せざらんとす。以賽亞五十三章十二節、彼得前書二章二十四節を讀むべし。エルサレムに於ける人々の憎惡がいかに主の苦痛となりしかは、馬太傳二十三章三十七節―三十九節に記さる。ゲッセマネの園に於ける彼の苦痛は、馬可傳十四章三十五節―三十九節に記され、また既に十字架につけられ、恐るべき罪の重荷にて、父のみ顏も、彼の眼に見えわかずなりぬる最後の苦痛に至りては、馬可傳十五章三十四節に記されたり。聖きこと彼が如く、寛やかなること彼が如く、愛すべきこと彼が如くにして、而かもこの恐るべき苦痛を忍ばざるべからずとは、抑も何故ぞやこれ即ち我等がかゝる苦痛を嘗めず、常に父の恩顏を拜してそのみ心に適ふまことの生活を送ることを得んがために、我等をして神のみ下に近かしめんとのみ心より、主は自らその苦痛を一身に負ひ給ひし也。諸君は既に身もたまも主に献げ給ひしや。

●第四週第五日　耶蘇の死

十五章二十一節―三十九節を讀むべし。

敵は耶蘇に向ひ、及ぶかぎりの惡計を施して彼を殺せり。友人故侶、既に主を失ひて、今は生ける甲斐なき心地す。『われは世の光なり』といひし耶蘇が、自ら造れるこの世界に於て殺さるゝに至りては、天地暗瞑に歸し去りしもまた宜ならずや。敵人は十字架の上にある主に向つて、嘲罵の聲を擧げたり。（十五章三十一節三十二節）。『自己を救ふ能はず』。彼を信ぜし人々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の望を繋ぐべきたよりは、一も殘存するものなきに至りぬ。路加傳二十四章二十一節を見よ。『我儕イスラエルを贖はんものは、この人なりと望みたりし』—而してその人は今既に死せり。あはれ、事只玆に終らんか、その缺陷は何を以てかこれを塡めん。あはれ、純潔かくの如く、人々のために奇蹟を行ふ力の大なることかくの如く、神の愛をあらはすことの類なきことかくの如くにして、尙且敵に滅され、死に服せらるゝを免れざるか。哥林多前書十五章十六節—十九節を見よ。主は我等のために死し給へり、されどこれその終極にあらず。哥林多前書十五章二十節。

●第四週第六日　耶蘇の復活

十五章一節—十八節を讀むべし。

耶蘇がかねて求め給ひし理想は、復活の朝に於て遂げられたり。これ即ち彼がすべての權威をその手に保ちゐたりし證にあらずして何ぞや。かくて彼は悲哀に沈める弟子等の集れる處に歸り給へり。羅馬書六章九節。彼は我等の罪のために死して甦りたり。これ罪をしてその力を我等の上に振はしめざらんがため也。路加傳二十四章二十六節を見よ。哥林多前書十五章二十節、五十五節—五十八節を再讀すべし。諸君の希望はこの甦り給ひし耶蘇基督に存するか。諸君は事に臨み彼によりて勝利を得給ふか。

●第四週第七日　神の右に坐せる耶蘇

十六章十九節—二十節を讀むべし。

『われ往く、されどわが靈を爾曹に送らん、彼は爾曹を導きて、すべての眞理を知らしむべし。彼れわがために證をなし、わが言を爾曹に示し、わが榮を顯さん。われは世の終まで常に爾曹と共に在るべし。』使徒行傳七章五十四節—五十六節及び默示錄五章六節—十節を讀むべし。基督は甦りて天に昇り給ひし主にして、すべての敵を亡ぼし、今神の右に坐し給ふことを信ずるは我等にとりて一大歡喜といふべし。我等も彼によりて勝利を得る也。いひ盡されぬ神のみ惠を思へば、唯只榮光を彼に歸しまつるの外なし。哥林多後書九章十五節。主の求め給ふ榮光は、我等が日々彼と共に、

勝利の生活を爲すにあり。諸君果してこれを行ひ給ふか。

藻鹽草

靈魂の翼

エー、ヴィー、ボザンケット

（哥羅西三〇一―三）

日は照りわたりて、空晴れ氣清し。うれしやな、この時に當りて、我等は熱鬧の都を去り、遠く青山白水の間に遁る、旅程幾里、花うつくしく、眺おもしろしいつしかわが眼は高くひく丶、繁れる草間を戯れては遠く山の端がくれ舞ひのぼる胡蝶の姿に從ふ。かくて仰ぎみれば、長空一碧、燕や、鷹のいよ〳〵高く、僅にその片影を止むるを見るのみ。

忽ち一思想のわがむねに湧きいづるを覺ゆ、拂はんと欲すれども能はず、これ鳥や蝶の自由なるを妬むの心なるか、かの輩かく高く、天空に翅る時、我等は縛められる丶もの丶如く、低く地上に介立せざるべからず。胸裡聲あり、曰く、あはれ心のま丶に舞ひ上る翼もがな。然り、眼にみゆる翼は、樂しくとも、など欲しからん、只望ましきは、このおろかしき煩累、誘惑、懷疑を脱し、益なき、卑しき忘想雜念を去りて、一きは清くすめる大氣中に遊ぶべき翼を得んことにこそ。

わがいつくしむ青年女子よ、これ實に神が我等の心に與へ給へる善良なる一大渇望にして、いつかは必ず青年女子各個の心に起るべきものなるを信ず、この渇望にして、しば〳〵諸君の心に發生することあらば、此上なき幸福といふべし。また靈魂が、塵垢の裡に跼蹐することなく、高く向上の路を進むべきものたることは、この渇仰心の存在するによりて知らるべし、またこれによりて神が我等のために、高尚尊榮なる賜を與へつ丶あることを證するを得る也、神にして若しこの渇望を充たすの意なくんば、何とてこれを我等の心に發生せしめ給はんや。

毛蟲は遲鈍にして、只匍匐するの外、何等の希望を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

有せざるが如し。されど蛹の内部に於て、漸次うつくしき翼を生し、終には優美なる蝶となりて、輕く空中に飛ぶにあらずや、かくの如く、すべての靈魂が、貧しく、弱く、罪多く、望なきが如く見ゆれど、尙ほ神は我等が眼を高きにつけ、一個のうるはしき人物となるべきことを欲し給ふ。されば、この一事は的なき忘念にあらずして、我も人も、自ら遂げ得るものなることを知るべし。

これ基督が「我が後に從へ」といひ給ひしことばの意味の一面を表す、我等はこの世に於ける基督の高尙無垢の生涯の跡を辿りて、常にこれに從ひゆかざるべからず。されどこれのみにては未だ足れりとすべからず基督のは今もなほ天にゐまして、活ける救主たることを忘るゝなく、心を盡して彼に從ひ、長へに彼と共に在ることを勉めざるべからず。これ恰も哥羅西三章一―三に示す處の如し。かくてわが足はこの地上を踏み、わが手はこの俗務に忙しき間にも、わが靈魂は、常に天のきよき大氣中にあることを得。これ空しき夢に過ぎざるか。その實行しかく困難なるか。然り、誠に然り。さらば何が故に然るか。

(一)これ我等が全く世間的自己を脱却し、凡俗的境遇を超越するの力なきを以てなり。鳥も翼破れ、病を得息絕えては、また飛ぶことを得ず、輕氣球も瓦斯滿たざれば、空中に登るに由なきが如く、我等の古き性質は向上の道を發見するを得ず。只地に屬する一個の死塊に等しく、片翼もなく、よしこれあるも、そは破れはてゝ、虛弱用をなさゞるものゝみ。世の人々はこの古き重荷を負へる心を捨てずして、高く飛ばんことを勉む、稀に飛揚することを得べしといへども、失望落膽、忽ち再び墜落し來る。世上往々にして確固なる決心挫けはてゝ、巧妙なる計圖の失敗に了ること多きは、偏にこれがため也。かくの如くにして飛躍を試みんとする、これ眞に徒勞に過ぎざるのみ、(羅馬書七章)。

さればわがいつくしむ友よ、請ふ先づ新しき向上の心を養へよ。この性情は只神―活ける神のみこれを與ふることを得べし。この新なる性情は、高尙壯嚴の妙

域を慕ひて、天かける翼を有するに至らん。

『人基督に在る時は、新たに造られたるもの也。舊きは去つて、皆新しく作るなり』。(哥林多後書五章十七節)。

『おゝ神よ、わがために清き心をつくり、わが衷になほき靈を新たに起したまへ。(詩五十一篇十節)。

死斯が輕氣球を揚げ、これをして悠々虚空に浮遊せしむるが如く、我等の衷裡に働きたまふ神、即ち聖靈は、我等の心をして天高く昇らしむ。この働こそ實に我等が求むる大なる力なるなれ。

(二)されど重き砂嚢を積める輕氣球は、高く昇るとを得ず。足を縛められたる鳥は、止木を去つて、一間の遠きをも飛ぶと能はざる也。友よ、君等をして進むこと能はざらしむる重荷や、鐵鎖はあらざるか。その翼にまつはるものは一もこれなきや。例へば悔ゐ改めざる許されぬ罪の重荷はなきか、君等は眞におのれの罪を悔ゐ、すべての惡を却くることを心にさだめしや。主耶蘇はおのれの救主たることを信ぜしや。過去の記憶や、おのれの性質について自ら知れる處を神に告白しおのが知らざる或は忘れたる罪の宥恕を受けんために、すべてこれを神に懺悔したりしや(約翰傳一章七―九)。

罪は重くして、耻づべき荷を人々に負はしむ。罪の重荷をおのが心に負ふ間は、人は歡喜の情を以て、父なる神のみもとに進むこと能はざる也。『わが不義は重荷のごとく、負ひがたければ也』(詩三十八篇四)。されど基督は自ら罪なくして、我等の罪をその身に負ひ、我等を救はんがために、十字架にかゝり給へり(彼得前書二章二四)。我等は固くこれを信じ、馬太傳十一章二八にある約束に從ひて、その恩願をうくべき也。

自からその惡しきを知りて犯す小過失、惡習慣の如き、また祈禱を献ぐることを怠り、聖書を讀むことを忽にすること、自らよからずと思ひて廢しがたき、愚かしきわざ、剛腹にして愛なき心、人を恐るゝ卑屈心去ること能はざるか、或は去ることを欲せずして、おのが胸底に潜める惡癖、是等のもの我等を壓するが故に、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

神のたまへる自由の翼に乘じて、高く上ることを得ず
されど我等は凡ての重荷を除去するに勉めざるべから
ず。(希伯來書十二章一)。
また博愛、寛恕の精神を養ふに心せよ。憎惡の性は、高尙、純潔、平和の生涯に到る最大なる障害物にして、博愛の心は、我等の靈魂が天國に昇りゆく確證となるもの也。(約翰傳三章一四章四―七)。
されど我等は宜しく信と愛との翼を求め、神の力に依りて日々天の淸光に飛揚し、ながく神と共に居らんことを願ふべし。かくてこそ我等は、神の御使の如く靈位に侍りて、よく神の命を果し、また人に喜と幸とを與ふる惠まれたる者となるを得るなれ。(路加一〇章一九)。

學校の歸途思へること

しのぶ

午後六時半校務を終り、電車にのりて歸路にむかふけふは朝來の劇務に疲勞甚しく、車上幾もなく惰氣を催しぬ。
「小石川橋お下りの方はありませんか?」
この聲に驚かされて窓より見出せば、今しもかの砲兵工廠より不調法なる列をなし、辨當箱を携へて、出で來る工女ひきもきらず。
チン、チーン!「へえ、動きます!」車はまた再び動き初む。
近來女子にして諸製造所、會社、商店等に通勤し、自活するもの丶增加したるは、誠に驚くの外なし。蓋し現時の女子に、有爲の氣象の生じたるによるならん。おのれ、決してすべての女子は、神より附與せられたる天職を外にして專ら自立すべきものなりとは信ぜざれど、從來の如く、男子の寄生蟲となりて、自己自ら何等の實力をも備へず、一朝事あるの日は忽ち活計の道にまよひ、爲めに種々好きしからぬ行をなし、或は徒らに他人の袂にすがりて助を求むるが如き、あさましき境遇に陷らざるやう、豫て自立し得るの潛勢力を養ひおくの必要あるを認むるのみ。さて、かくの如

く、多數の女工が、早朝より日暮に及ぶ迄、專心勞働に從事しつゝあるを見れば、その行のけなげさ、感ずるの外なく、世の所謂高襟(ハイカラ)的令孃の遠く及ばざる所なり。我等はこの點に於て、彼等を尊敬せざらんと欲するも得ず。只願ふ、これらの女工の抱ける理想や果していかならんと。一念玆に到れば、我等基督敎信者たるもの、その任の極めて輕からざるを感ぜずんばあらず。殊にこの重任は、懸つて我等女子青年の上にあるにあらざるか。されば我等は徒らに世の風潮を逐うて、虛榮の巷に彷徨することなく、宜しく心を一にして、全能なる神の助により、御心のまゝに、力のかぎり活動して、以て神恩の萬一に報ひたてまつらでやはある。

家庭

家　政

家政を巧みに整理し、一家の安樂と共に、これが衛生にも心を用ゐ、三回の食事を備ふるにも、只美味のみを主とせず、筋肉を增し、新鮮な血液を多くするやうな滋養品を撰び用ゆる心掛ある人は、丁度美術家としてその譽を得、校長としてその名を知らるゝと均しく、成功したものと云はねばならぬ。これはスサン、テル、ペリー氏がかつていつたことであるが、げに巧に家政を整理するのは、何よりも優れた事業をなすものと云はねばならぬ。美術品はなくても、私共の生活にはさして困ることもなく、學校とても、未だ絕對的になくて叶はぬといふ程のものでもない。只一部の人がそれで便益を享くるばかりである。併し、愛の光にみちたまなざしをして、うらゝかな顏ばせを以て妻が一日の勞働に勞れて歸り來るその夫を門邊に迎てくれる時には、夫の身神は、全くその疲勞を忘れて、限なき慰籍をうけるのである。またそのやさしい手して捧ぐる、心づくしの夕餉は、たとへ山海の珍味はなくとも、實に死を生に復へすの力があるのである。こんな婦人は、どうしても無くては叶はぬものである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

故に青年女子たる皆さんは、宜しく全力を盡して、その家庭を安かに、清く、恰も天國のやうにするこの不思議な方法を學んでいたゞきたいのです。自分が高等敎育の學校にはいれぬからといつて、決して〳〵失望すべきものではない。

まことの女子の最高敎育は、家庭をしてこの世の中で一番愛すべき所とし、心を勵ます所とするのに、最も優れたる方法を學ぶことである。『自分を救主のみ前に導いてくれたものは、母が諄々として説いて聞かした説敎でなくて、その不言の行であつた』とは、ある青年の言である。

皆さん、自分が毎日交際なさる人々を、神の導きに從つて世を送るやうにするうるはしき務を果すことは、決して敎育の力に依るのではない。只この大なる神の感化、即ち博愛、歡喜、平和、忍耐、柔和、良善信仰を實行練習することに依るのである。

（ガールス、コムパニオン）

他のためにとて、自ら快活ならんと勉むる女子は、幾もなく心もまたその擧動の如く、おのづから快活なるを得ん。

雜録

●萬國基督敎女子青年會大會　頃者英國より萬國基督敎女子青年會大會の標語（モットー）を附したるカードを送り來れり。その語は左の如し。

『萬軍のエホバのたまふ。これは權勢に由らず、能力に由らず、わが靈に由る也』

これ明年五月佛京巴里に於て開設せらるべき同會のために、我等をして心を合せ、神の祝福を祈らしめんとて也。日本に於ける女子青年も、主基督によりて、かの歐米の友人と共に神のみ國を建設すべき責任を分ち、互に相提携し、大に勇往邁進することを覺悟せざるべからず。

●ホーランドに開設せる萬國學生基督敎青年同盟大會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の状況に關しては、未だ詳細の報に接せざれども、歐米の女子學生が、共に心を同うして、われ等日本女子學生の間に、主の王國の速に成立せんことを祈れるを聞くに至つては、いかに我等の責任の大なるものあるかを想はざらんと欲するも得ざるにあらずや。

●合衆國のジョーン、ワナメーカー氏は支那、朝鮮、日本に於ける青年會館建設費として二十萬圓を寄附せりといふ。內五萬圓を以て、近く京都に新しく一青年會館を建築するの計畫あり。

●合衆國基督教女子青年會は、去る五月デトロイトに於て大會を催したるが、頗る盛大にして、各地より集り來りし代表者は五百人の多きに達せりといふ。頃者同大會の名を以て飛信到來せり、曰く、同會は日本女子青年のために熱誠なる祈禱を獻げたりと。

●三年前わが日本に渡來して、大に學生間に基督教を鼓吹したる萬國基督教青年同盟幹事モット氏は、先頃英國オックスフォード大學々生のために講演を開設したるが、その結果實に顯著なるものありて、學生中悔改者を出だしたるもの甚だ多く、かつ一般に宗教的風尙を喚起するを得たるは、我等が遙に慶賀する所也。

many an ambitious girls, anxious to excel and to become fitted for a more remunerative position than her present one, is, by means of the instruction given by competent teachers, able to secure better work. A higher advantage than this accrues to those who attend the Bible classes and devotional meetings, and studying the way of life, are led to know and serve the Master.

Settlements which are the beacon-lights on some of our dark coasts in city life, afford opportunities similar to those of the Association to working girls, and under their auspices, very useful and interesting clubs are organized, the members of which form the most agreeable companies of congenial comrades. Here too, in warm well-lighted rooms, and in the sisterly care of consecrated women, girls find the stimulus their social natures crave. The best thing about all this work of woman for woman is that there is in it neither condescension nor servility, it emphasizes no class distinctions nor so much as recognizes the existence of caste. The banker's daughter comes from her home of luxury to spend an evening with the laborer's child; the rich girl clasps hands with the poor girl on equal terms. In the reciprocity of their mingling, each helps the other, and there is no thought of giving or taking, for all are blessedly one in a service of love.

"A servant with this clause
Makes drudgery divine
Who sweeps a room as for
God's laws,
Makes that and the action
fine."

"Whatsoever thy hand finds to do, do it with thy might. Whether therefore ye eat or drink or whatsoever ye do, do all to the glory of God. Whatsoever ye do, do it heartily as to the Lord."

From "Winsome Womanhood"
by Margaret Sangster.

At its last meeting held Saturday, June 10th, at the home of the Secretaries, the Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan accepted with sincere regret the resignation of one of its original members, Miss Harriet Wyckoff. We share, however, her joy in the new field she soon will enter and pray God richly to bless her and hers and satisfy through them the thirst of many who are waiting still to hear of the waters of salvation.

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Men believed of old.
At the breast the babe will grow;
Whence the milk he need not know.

G. T. S.

"I was in a summer boarding house with a friend, when her little niece came to spend the day with her. Soon after the child got there it began to rain—a long summer day's rain. Something had to be done for the little one, so my friend set her to feeding the sparrows that had gathered under the porch. Soon she was as happy as could be watching the birds pecking at the bits of bread.

"Oh, auntie, just look at the birdies!"

"Yes pet—God's birdies."

Presently the child came up to her aunt very solemnly. "Auntie, baby loves God's birdies."

"Does she? Then I think she had better tell Him so some time."

She went back to the window, and soon we heard her baby voice saying: "God, I love your birdies. Let them play with baby all day."
—*Selected.*

Many young business women belong to the Young Women's Christian Association and I wish with all my heart that the friendly and affectionate companionship which that sisterhood of honorable and loving women affords, might be shared by every girl who has her own way to make. Wherever there is an Association with its resident Secretary whether in large city or small town, there is a pleasant center, a rallying place for working women. Reading-rooms, where books and periodicals are provided, rest rooms with cozy corners and easy chairs, parlors where small groups and larger ones may enjoy music and conversation, clssses in various useful branches of manual and intellectual training are provided by the Association, and young women, who are remote from their homes and their own people, may here meet those who will give them motherly counsel and personal guidance. Especially is this worth a great deal to girls in a strange place, living in boarding houses and seldom able to be with their families and with friends who have always known them. The secretary is a sweet Christian woman, young as they are, frequently college-trained, full of sympathy, discreet, tender, tactful, and consecrated. Evenings which hang heavily upon the hands of a business woman away from her home pass swiftly and delightfully in the Association Rooms, and

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

spoke gently. "Why, Billie!"

The boy had been struggling bravely to quiet himself, but at his father's words he burst out, "Oh, Dad? she isn't there—she can't have any!"

The father was almost frightened at the strength of the boy's grief. "Hush, Billie! She's very happy, you know; she don't need any o' these."

"But I want her to want them," broke in the child passionately; and Robert Sloan bowed his head against the rough little head on his shoulder.

The touch of his father's tears quieted Billie, he had never thought that men could cry. His arm stole up around his father's neck, and presently he sobbed, "I didn't mean to cry, Dad. She said not to, and I haven't hardly any but at nights. She doesn't like us to cry, I guess."

Then for a long time they sat in silence, growing calmer, and tne low roar of the ocean was the only sound. At last Robert raised his head and saw the sky golden in the west. "We must go home, son."

They struck directly across through the gathering gloom of the cedars. The father led the way with the heavy basket on his arm; and he was so silent that Billy vaguely feared the comfort of his new fellowship vanishing.

He could not see how all the bitterness had gone from his father's face. Finally he seized the great brown hand, and said, wistfully, "Dad, will you tuck the covers in to-night?"

Yes, Billie, his father replied, looking down at him with a smile that satisfied Billie completely.

In the boat he snuggled close to his father while they drifted homeward before the fainting breeze; and Robert Sloan with his arm about his boy and a new peace in his heart looked up at the darkening hills and the glowing sky.—*Selected.*

Let Him lead thee blind fold onwards,
 Love needs not to know;
Children whom the Father leadeth
 Ask not where they go.
Though the path be all unknown.
Over moors and mountains lone.
Give no ear to reason's questions;
 Let the blind man hold
That the sun is but a fable

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

and never mentioned his mother. But then he was only a child.

The father did not guess that behind him, under Billie's old straw hat, the little brown face so like his own in every feature grew almost as sad, though not as bitter, as his own, whenever it was not kindled at some new discovery; nor did he see the steady blue eyes twice fill with tears, which Billie hastily dried on the sleeve of his blouse. When his father looked back Billie was whistling and flourishing a switch.

As they went on, every time they came up out of a hollow the low murmur of the ocean which formed a background for the silence swelled a little, until at the edge of the cedars a sudden wind flung the sound full upon them. As he looked he heard a boom and a low, swift, singing noise, and far out at sea a great column of water spouted up.

"Oh! what's that, Dad?" he cried excitedly.

"That's a shot from the big guns at the testing station," said his father. "Pretty soon you'll see another." He spoke quietly, but he was oppressed with a sudden sense of the world's carelessness of his sorrow. No one cared except himself; everything was going on just the same.

They had turned northward along the wide grass-grown beach. Billie had to run over to the water's edge and back. More and more ships kept coming in sight. Twice they heard the big guns boom out again.

Then, after walking a long way, and passing the bare plum bushes unloaded by other gatherers, they reached a place where the dark blue fruit hung almost as thick as grapes.

It was very exciting, for the fullest bushes were always a little farther on. Besides eating a great many plums, Billie filled his basket twice and emptied it into his father's big one. "Ain't they beauties, Dad? We've almost got it full, and ain't there a lot? Won't mother—"

The sentence ended abruptly, and the man, who had been only half listening until the last word struck his heart, turned quickly. Billie had disappeared. The father, his face sharp with grief, stood up, and walked over to the nearest plum bush. Behind it, where he had flung himself face down in the sand, lay Billie, one hand thrown out over his head, his whole little body shaking in a passion of sobs.

Dropping on the sand beside him, his father lifted him without a word. As he clasped the quivering child, and felt the rapid heart beats against his own, a great wave of tenderness rushed over him. Before it the hard, dead weight of his grief changed like an ice-bound stream at the touch of spring; it swept him in a mighty torrent, but it was no longer frozen and death-like. He

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Dear Lord! The summer is here and there will be hot days. More real than any physical thirst create in every one of us a thirst for Thee—our living God, such a burning thirst as will not be satisfied till the windows of heaven are opened to our souls and there is no room to receive the fulness of Thy blessing. Our expectation is from Thee.

HOW BILLIE'S FATHER FOUND COMFORT.

BY IZABEL MCKINNEY.

Billie and his father were following a foot path through the dwarf cedars and scrubby underbrush across Sandy Hook. The path wound in and out over the ridges, and Billie had to trot briskly to keep his father in sight. Robert Sloan was a tall man, and he strode along with bowed head through the warm, sweet stillness, without apparent regard for the patter of the bare feet behind him, but, when once it paused suddenly he turned and looked back.

One week before, Rachel, his wife, had died, and with her went the strength of his strength. His rough, sun-browned face was shadowed with bitterness as well as grief, for his thoughts were bitter. Rachel was too young to die: it seemed too hard, too cruel. She had been so much to him. She was too good for him; but it was all so so sudden. He had not thought her very ill; he could not get used to it. All this he felt, rather than thought. All the week he had been trying with the energy of a strong will to work out his grief.

Nothing was of any use, however. All his familiar occupations—clam-digging, fishing, gardening, every thing customary—had become blank and unbearable. He had tried to-day to escape from the familiar, but it was habit after all, that had brought him across to the Hook, where he had been every year for plums. He had never brought Billie before; but the boy had looked so longingly from the shore, that, partly to make a difference, partly to please the child, he had taken him into the boat. Billie was too young to understand, he supposed, but how little the boy seemed to care. He had cried at first, to be sure, and his father had held him on his lap and absently dried his tears. But since then he had apparently been happy in his play.

The neighbors had been very kind; had kept Billie several nights, and given him cake enough to make him sick, and Billie had eaten it,

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. II July, 1905 No. 3

THE SWEETEST LIVES.

The sweetest lives are those to duty wed,
Whose deeds, both great and small,
Are close knit strands of an unbroken thread,
Where love ennobles all.
The world may sound no trumpets, ring no bells;
The Book of Life the shining record tells.

Thy love shall chant its own beatitudes
After its own life working. A child's kiss
Set on thy singing lips shall make thee glad;
A poor man served by thee shall make thee rich;
A sick man helped by thee shall make thee strong;
Thou shalt be served thyself by every sense
Of service which thou renderest.

—*Elizabeth Barrett Browning.*

Do you know how it feels to be *very* thirsty? Do you remember that long walk you took up the mountain last summer when the sun was so hot and you had your dinner and every thing else you needed but there was no water to drink? You had to wait and wait until at last when you got back to the clear spring at the foot of the mountain nothing ever looked so beautiful or tasted so delicious as the clear cool water that quietly bubbled up from it. It *satisfied* your thirst.

Do you know how it feels to be *very* thirsty for *God*? To go on from day to day supplied with every thing you need except that clear stream that flows unmingled with human flavors straight from Him to you? Have you been kept waiting and waiting until the thirst was so unmistakable and unbearable that without the living Water you must die and then has He led you at last beside the still waters and *satisfied your soul*?

Oh! how good it is to get a deep drink from that Fountain! But one drink is not enough. There one learns what it is to be always satisfied yet always thirsty.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. II July 1905 No. 3

The "Young Women of Japan" is a Bible Study Monthly for young women published by the Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan Price 50 sen a year. Four *sen*, five *rin* a copy. Address 15 Dote Sambancho Kojimachi, Tokyo.

Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan.

Miss M. A. Whitman, Chairman.	Miss L. Hamilton.
Miss H. J. Wyckoff, Secretary.	Miss K. Tristram.
Miss Ume Tsuda.	Mrs. G. S. Phelps.
Miss A. B. West.	Miss L. Zurfluh.
Mrs. G. K. Hanai.	Mrs. H. Kozaki.
Miss H. J. Worthington.	Miss H. Hirano.
Mrs. V. W. Helm.	Miss S. Ellis.
Mrs. G. M. Fisher.	Miss E. M. Soper.
Miss Kin Sato.	Miss Kawai.

Miss A. Caroline Macdonald }
Miss Theresa E. Morrison } Secretaries of the
World's Young Women's Christian Association in Japan.

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治三十八年七月一日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

"That we may grow up in all things into him, who is the head, even Christ." Eph. 4. 15.

Vol. II July, 1905 No. 3

YOUNG WOMEN OF JAPAN

CONTENTS.

English.
- The Sweetest Lives.
- How Billie's Father Found Comfort.
- The Blessed Journey.
- Clippings.

Japanese.
- Editorial.
- The Womanly Character and Christianity. *Prof. M. Honda.*
- Aggressive Christianity. *Major. G. Yamamuro.*
- Bible Study. *A. C. Macdonald.*
- The Wings of the Soul. *A. C. Bosanquet.*
- On my Way Home from School. *Kin Sato.*
- Home makers.
- Miscellaneous.

15. Dote Sambancho, Kojimachi, Tokyo.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA